

御嶽祭祀からみる居住空間

— 宗教的空間と村落構成の関係について —

Keywords

御嶽 里 宗教的空間 居住空間 民俗方位



K10106

山崎大輔

1. はじめに

1.1 研究背景・目的

日本では古来から、様々な信仰や儀礼があった。正月の初詣や節分の豆まきなどは現在も広く行われている。だが、今日では多くの宗教行事が混ざり合っており、宗教と生活は密接に関わっているとは言い難い。いっぽう、現在でも宗教と生活が密接に関わっている地域が存在する。宮古島もそうした地域の一つである。たとえば、ある祭祀集団が持っている儀礼小屋は宗教的空間である。これはその地域の居住空間にも影響を与えている。

本研究では、宮古島に隣接する来間島にある宗教的空間の御嶽がどのような位置づけで居住空間に影響を与えているか調査資料から読み解き、考察していく。

1.2 研究方法

本研究は2013年8月17日から31日の日程で、沖縄県宮古島市下地地区来間島で行ったフィールドワークに基づく。

フィールドワークの内容は、住居内のものの実測・スケッチ、聞き取り調査、御嶽の調査である。いずれも過去の研究で調査しインタビューと図面作成を行った家庭を訪問した。

ものの実測に関しては既存図面を基に、最も使用頻度が高い部屋のもの一つ一つを平面、立面でスケッチし、高さ、幅を図り、記録した。

聞き取り調査は、インタビューシートを利用した。質問内容は、一日の生活様式や、一番大切なもの、空き家への関心、御嶽の信仰、管理方法などである。

実測件数は、インタビューシート、ものの実測ともに22件である。この他に、数人のインフォーマントに御嶽に関する聞き取りを行い、また、島にある御嶽の全てを地図上に落とし込んでいった。

2. 調査地の概要

2.1 宮古島の概要

宮古群島は沖縄本島から南西に約300km、東京から約2000km、北緯24~25度、東経125~126度に位置し、大小6つの島（宮古島、池間島、来間島、伊良部島、下地島、大神島）で構成されている。宮古島市の総面積は204km²、人口約55,000人で、人口の大部分は平良地区に

集中している。島全体がおおむね平坦で、低い台地状を呈し、山岳部は少なく、大きな河川もなく、生活用水のほとんどを地下水に頼っている。

高温多湿な亜熱帯海洋性気候に属していて、四季を通して暖かい気候であり、年平均気温は摂氏23度、年平均湿度は約80%である。

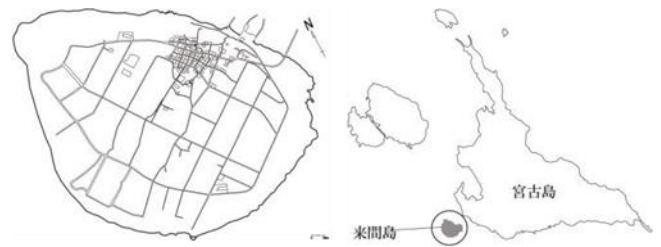


図1 宮古島・来間島

2.2 来間島の概要

来間島は宮古島から1.5km離れた離島である。面積は2.84km²、周囲9.0kmと小さい島である。平成23年時点の人口は91世帯で、163名である。65歳以上の人口は87名で、高齢化率53%と限界集落となっている。集落は東部の標高40mのところ立地している。

電話の開通が1964年末、電気の送電は1969年10月、水道事業の完成は1976年である。また、1995年3月に来間島と宮古島を結ぶ長さ約1690mの来間大橋が開通した。

地形上もっとも特色があるのは、30mほどの高さの断層崖が、ほぼ北西から南東方向へ走っていることである。集落は、この断層崖の上、ほぼ中央に位置している。

儀礼の行われる拝所は、集落内およびその近傍に多いが、集落北の崖の下、南の海岸にも見られる。断層崖の下中央あたりにカー（井戸）がある。

2.2.1 民俗方位

来間島には固有の民俗方位が存在することが確認されている。これは自然方位における「北」が、民俗方位における「北西」というように、時計回りの方向に45度ずれた観念である。これは民俗方位上の東に最高位の来間御嶽があり、対をなすイリヌ御嶽が西にあることからわかる。それぞれの方角に意味があり、東は男性、優位、西は女性、劣位、南は豊穡（ユー）とされている。東、

南は幸福に関連づけられることが多い。ここからの方位表現はすべて民俗方位とする。

2.2.2 ブナカ

来間島には”ブナカ”と呼ばれる集団がある。創世神話に基づいたものであり、長男家、次男家、三男家の3つに分けられている。上から順に、”スムリヤー”、”ウブヤー”、”ヤーマスヤー”と呼ばれている。これらの本家と父系血縁関係でつながっているとされている家々から構成されている。来間島の住民は必ずどこかのブナカに属し、子々孫々まで続いていく。ブナカの正式会員は、成人男性と限られており、ブナカへの帰属は父系的に決められている。未婚女性は父のブナカに属し、既婚女性は夫のブナカに入るものとされている。

2.2.3 神話

来間島には創世神話が存在する。宗教空間と居住空間との関わりを理解するためには重要である。この伝承に登場する3兄弟が前述したブナカの起源とされている。そして祭りごとが後述するヤーマス御願のことである。

また、この話とは別に島建て神話も存在する。来間島には、「昔、男の神様がアガルヌサツに、女の神様がイルヌサツにおりられ、これら二神が来間島を生んだ」という神話が伝えられている。この伝承では、東の男神と西の女神が、島の中央で出会い、交わり、そして来間島にある生物たちを生み出したとされている。その夫婦神が井戸（カー）を発見し、集落が発展していったと伝えられている。その男神とされるティンガヌスを東の御嶽に祀り、女神とされるタカガミを西の御嶽に祀っている。

2.2.4 ヤーマス御願

来間島には数多くの宗教儀礼が存在する。その中で最も大きな御願がヤーマス御願である。1日目の行事は、各ブナカの本家に集まって行われる。一番座と二番座の間仕切りをはずして、大きな空間をつくる。一番座の東半分に男性が、西半分に女性が座る。次に、その年に生まれた子供がブナカに入ったことを祝って親がブナカの会員全員に酒や魚を配る。また、成人男性がブナカの正式会員になるために酒と魚を配る。

2日目の行事は、まず演芸大会のための打ち合わせが行われる。各ブナカの男性の棒踊り、女性の踊り、郷友会のだしものの時刻を決めるものである。その後、祭りが行われる。

伝承上の3兄弟と擬制的につながるとされる3つのブナカを単位として行われるヤーマスウガンは、その名称からも明らかのように、3兄弟の出来事を記念するものであり、同時に子孫繁栄や、豊作も祈願されている。

3. 御嶽

3.1 御嶽とは何か

御嶽（ウタキ）とは、杜（ムイ）、山（ヤマ）、元（ムトゥ）、里の神、根所（ニードゥクル）と呼ばれる

聖地の総称である。山や杜そのものを聖地と考え、そこに石や香炉を置いて、イビと呼び、信仰の対象を祀っている。それが本来の御嶽の姿である。御嶽の神々には、時を定めて遠来する神や常駐して人々を守護する祖先神、個々の伝承と由来をもった英雄神・産業神・血縁的なもの・地縁的なものなど、それぞれの神々が合祀されている。それらが神祭りを通して人々を守り、村の災いを除き、豊穡（ユ一）をもたらすものとして信仰されている。

3.2 沖縄、宮古の御嶽

沖縄の御嶽は、琉球の神話の神々が存在、来訪する場所であり、一部落に御嶽一か所が基本である。

宮古の御嶽は、一部落に数か所が通例であり、沖縄の村々の聖域と比べると相対的に聖域の機能分化が発達している。御嶽祭神の性別が記されているのも宮古のみで、神の機能も、航海神、航海兼諸願、諸願、鳥守神などおよその区別がされている。御嶽では村の祭祀をつかさどる司と呼ばれる神女を中心に、年間を通して種々の祭祀行事が行われる。御嶽は時として人々の立ち入ることの許されない場所であるが、祭りの日には人々が神と交流する場となる。

4. 来間の御嶽

4.1 村落空間の中の御嶽

村落の中の御嶽は大きく分けて二種類ある。西向きの御嶽と南向きの御嶽である。西向きの御嶽はいくつか確認できたが、そのなかでも東の御嶽、西の御嶽と呼ばれる御嶽は来間の中でも特別な存在とされているもので、神役の女性など限られた人のみ入れる空間である。写真1は来間御嶽（東の御嶽）である。南向きの御嶽は主に里御嶽と呼ばれており、村の形成に密接に関わっているものである。この里御嶽は誰でも出入りが自由な空間である。



写真1 来間御嶽（東の御嶽）

4.2 里御嶽

里御嶽とは村の中に点在している、いくつかの民家で管理、崇拝している南向きの御嶽である。そのひとつひとつに神がいて、学問、金、健康、豊作、豊年、船、火、子宝など役割も様々であるが、里とその里に属する村人

の豊年・健康祈願をする御嶽としての共通点がある。基本的には村落が出来た後に里御嶽を設けることが多いが、例外も存在する。

里御嶽は村落構成のうえで大きな役割を担っていて、来間の村落は里御嶽によって分けられた「里」という単位で組織されている。里毎にルールが決まっており、御嶽の掃除の方法、管理の方法は様々である。今現在この里の表現はあいまいになっていて、村民でも知らない人が多い。

里の他に「組」という近年の区分も存在する。これは運動会など村の行事の組み分けを成しているほか、複数の里の集合体との事実も確認できた。

組は4組までであるが、その一つ一つにも里御嶽は存在する。

5. 御嶽からみる来間の空間

5.1 御嶽の向きによる分類

5.1.1 西向き御嶽

西向き御嶽は5つ確認することができた。そのほぼすべてが村落の北側に位置していた。この西向き御嶽はその大半が儀礼等で用いられる村落のなかでも重要な御嶽であった。例外が存在し、西の御嶽は東向きになっている。これについては後述することにする。また、東の御嶽から西の御嶽に向う道は「神の道」と呼ばれている。

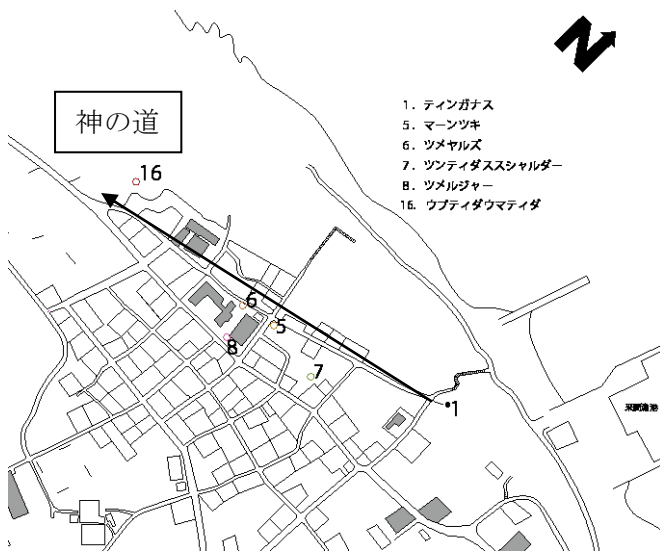


図2 西向き御嶽分布

5.1.2 南向き御嶽

南向き御嶽は9つ確認することができた。そのほとんどが村落の中心付近に集まっていてほぼ南北に延びるような形で分布していることが確認できる。一番北側にあるのは島の主、スマヌスという神が祀られているカーの御嶽であり、東の御嶽、西の御嶽と同等に重要な御嶽である。井戸の御嶽として井戸の神も祀られている。



図3 南向き御嶽分布

5.2 里、組、村落

5.2.1 里

里とは前述した里御嶽によって分けられた、村落の区分である。里区分・里御嶽分布は図4のようになっている。里の規模は様々で一番大きな里では20世帯以上、一番小さな里では一世帯で組織されている。それぞれの里で、一つの御嶽を信仰・管理している。一世帯で構成されているところはブナカの長男家、次男家の本家である。

図4からわかるように、里の大きさに統一性はない。地域によっては里御嶽ではない御嶽を里の神としているところもあった。また、何年も手入れをされていないようなところもあり、里御嶽信仰が薄れている地域が少なからず存在した。

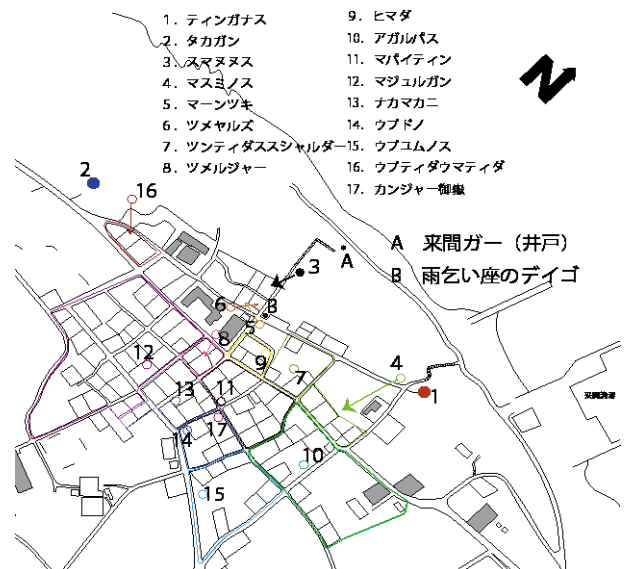


図4 里区分・里御嶽分布

5.2.2 組

組とは、里がいくつか集まって構成されている里よりも大きな区分である。小学校に隣接している東の道路、南側の一つ向こうの道路を境界として4つに区分されている。それぞれ信仰する御嶽は異なっていて1組はアガ

ルパス、2組はナカマカニ、3組はツメルジャー、4組はマジュルガンとなっている。

組では里と違い、定期的に掃除をし、御願をするということは確認できなかった。里という認識が薄れ、組という認識が強くなってきた要因としては、村落の人口減少が一番の要因と考えられる。そのため人口が減った里と里を合併し、組という大きな区分にしたと考えられる。

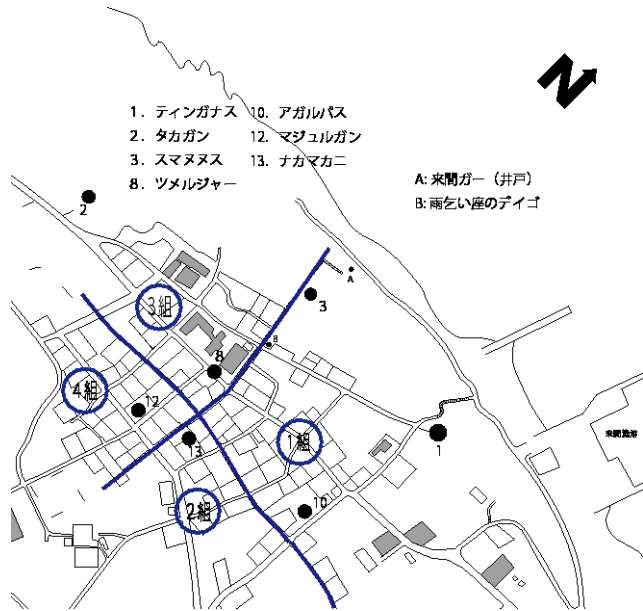


図5 組区分地図

6. 考察とまとめ

6.1 考察

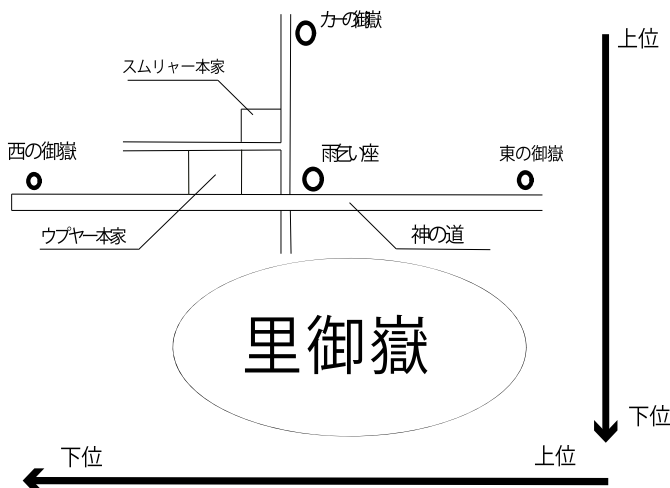


図6 御嶽上位下位関係図

まず御嶽の向きによる考察である。先に述べたが、西向きの御嶽は神の道といわれる道沿いに並んでいる。西向きの御嶽だが、最も上位とされている東の御嶽が道の東の端に配置されている。その反対側に西の御嶽西の端に配置されている。これは東側が上位、男性の方位であることも関係していると考えられる。そして、西の御嶽が東向きの理由だがこれは東の御嶽と対をなす女性神だからだと考えられる。

次に南向きの御嶽だが、島の主が祀られているカーの御嶽が集落の一番北に位置している。そして神の道よりも南側に他の南向きの御嶽が配置されている。これは背後に上位のものを置くという考え、背後上位の考えが関係していると考えられる。その関係を示したものが図6である。村落では北と南が上位となり、西と南が下位となっている。長男と次男の本家が他の民家よりも北側に位置し、神の道沿いにあることから背後上位の考えがうかがえる。

6.1 まとめ

来間の空間構成を考えると以下ようになる。図4から明らかになるように、神の道よりも北には里は組織されていない。これは、神の道よりも北が神聖な空間、上位に位置しているからだと思われる。長男家、次男家は神の道よりも北に里を形成しているが、これはブナカの関係上、他の村民よりも上位の立場にいることからこの位置になったと推測ができる。

ではなぜ里が組織されたのであろうか。長男家、次男家は一世帯で一つの御嶽を里御嶽とし、特に長男家はカーの御嶽、島でも重要な御嶽の一つを里御嶽にしている。上位に位置するこの長男家が水という人々の生活に欠かせないものを司る神から守護をうけている。それが村落の空間構成の基本的モデルとなっているのではないのだろうか。事実、南に位置する御嶽は北側に位置する御嶽よりも後から作られたものである。ブナカの当主と同じように里をつくり、それぞれで里御嶽を管理し、守護を受けることで、島は繁栄を図っていたのではないのだろうか。

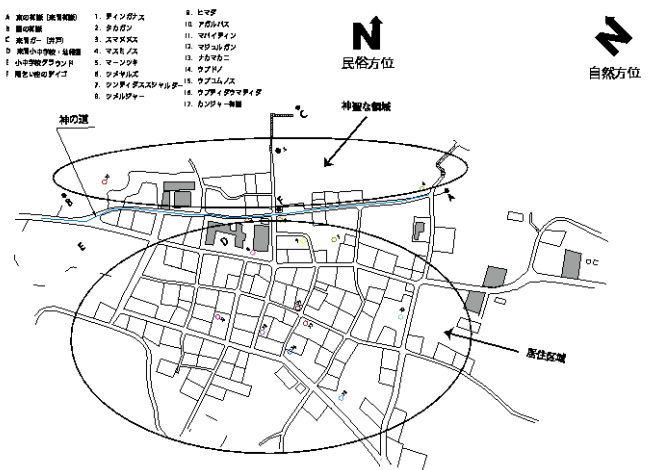


図7 宗教的空間と村落の関係図

参考文献

- 1) 松井健『儀礼と口承伝承』、国立民俗博物館研究報告別冊
- 2) 平良市史 第九巻 資料編7 (御嶽編)
- 3) 牛島巖『琉球宮古島諸島の祭祀構造研究の問題点』
- 4) 森口豁『沖縄 孤島の地図 344号』